









とりのき

徳屋著

目録



返答とらふとあつた一皮又くはたの取かき  
 志の只一語よりき事乃所りてその詞は片假名  
 書り又文を飾りて見む人交をいふ事  
 巻一

吸流唐凌足片翻ヲ説ノ冊子取回之妙冊子其の中  
 マテ骨備ハレルヲ覺工故ニ爰ニ記ス其文中ノ趣白ヲア



カフ事ハ支考以下ノ俳風ヲ殆ノ存子節テニハノ事ニ到ツ  
テハ宗鑑貞徳等ヲ譏ル者貞享蕉門情風ヲ取ル無名  
ノ俳諧ニ於テハ耳ニ障ル所ナレ還ワテ古ヲシトフ荷擔ノ者  
ノ如シ然レモ諸ニ誤リ説ニ相違ナクハアラス依我同風ニ  
遊フ人ヲシテ見惑ヒアラン事ヲ恐レテ一ニヲ附言シテ去迷ハ  
サルノ道ヲ明カサント欲ス其上話中ノ一語ニ答セテ叶ハサル  
一言アツテ一夜俄ニ筆ヲ添ユ



上卷

高キハ本文也略シテ上下ヲ記ス後准之

やつゝの若くし………ひらつとむとむひらつとむ

コトハ聞エ又足テ諸俳家ユタヘゾアリスベシ予ノ思ヘリ

後足初ノ禅室ニ入ル年アリ奈何ソ黙シテ蕉門ノ意ヲ

悟ラサル只東西ニ回ヒ南北ニ回フカ爲ニ迷フテ蕉翁ノ心

魂ヲ不見俳諧ノ無名ナルヲ不知シテ浮世ノ俗誦ヲ以テ

混シテ卑言トス惑ヘル哉我蕉門貞享ノ情風ニ於テ













僧徒ニ落シテナケキ玉ヲヨリ今ニシテハ猶スラニ侍  
ラントノ議論ハ當ラズ其ノ如クニ段々セハ今鳥獸  
ヤ文學セシ依テ文學野ニ落シヤ上ニアランヤハ子ガ  
知ル所ニアラズ盛衰ノ論ハ別ニ高眼ノ人アツテ  
知ラン其上道アル御代ノシルシニソヤツカレト云出ル  
ハ尊大ナラン

片歌乃条

片歌乃条ハ見ルハ………中よわけつらん

○ 片歌ノ首ハ片歌道ノハシメト云冊子アリシ越後今町  
ナル人ニ對シ起索ヒアリ我モ其人ニ對セシニ心得サ  
ハ事トモ侍リシ今ニ夜百夜ヲアケテ此冊子ヲ不云  
ハサテハ道ノハシメハ捨玉ヘルカ或ハ又ナド、云中ニ籠ル  
カ圃カマホシ

凡片歌ハ少クハ代を………ふアコよらそやふもまこ  
ま……む

此條ハ理リ也俳諧へ用ナケレハ不論セ歟レ凡我思



フニ片歌ハ本哥ノ人 是ヲナス別ニ家ハアラス故人ニ  
片歌ノミヲ以テ一家ヲ立タル人アラハ告玉へ若ナクニハ子  
カ漫リニ新立ヲ好ム者トセン

爰ニ依テ思フニ免角ヲカ説ク所ノ無形ノ蕉門ニ歸  
シ玉へ詩歌連誹皆我内ニアリ思ヒテ四海ニ馳セテ自  
由限リナシ今子カ述ル如クノビラニミヤヒナルハ上代ノ片哥  
也ト誰モ左息へリ是ニ依テ芭蕉翁モトム交ラントフ  
故ニ今ノ蕉門ニ暫ク古調ノ名ナリ然レ氏衆人古調ノ

源ヲ不知ヲ半ヨリ拾テ下リテ又卑風ノ俳諧ノ徒トナル  
ナル者多シ誠トニ悲ムヘシ惜イ哉

上代乃片歌

かみくもいやく...  
日本紀  
古事記

此條ハ丈ニ理リ也我蕉門專ヲ是等ノ数章ヲ以テ神  
佛ノ如ク崇ム但シ片歌トテ尊トムニハアラス及歌長歌皆カ  
ガ尊ム也其形ヲ捨テ其心ヲ尊ム情ヲ押習フカ爲

ナリ



中世乃片身

同のヤとそ………かまのりれとまよく

此條モ論ナシ皆是奇人ノ時トシテヨミケル  
ナリ手本トセハ常ノ三十一字コソ然ルヘシ形チラ  
取ラントテ斯ク探リ求玉フハ無用ノ苦ニアラスヤ

萬葉集の家とりて………并優格あり

後小倉集の家乃………短歌のさ後とハ似たり

此條別事ナシ似タルヲ云ハ、我蕉門ノ古調ニチ

カシ是又例ノ形ヲ求メ玉フ也我無形蕉門ノ俳諧  
ニハ是等ハ心裡ノ古草ナリ此外ニ一活場ヲ求ムキ  
議論アリ具眼ノ人ト語ルヘシ

一箇ひとの曰俳諧あり乃………然らず是ハ後々

實モ左アルベレウケヒカヌ者ノミナルヘシ詮ナキ事  
ニヤ餘ハ別事ナケレハ不諭

後乃といふ系

後乃ハ上ニ言を………事ハあきしけ











江戸柳居此門ノ人ト見ハ子ガ弟テ知所ナレハ論スルニ  
足ラス此切字第三トメ事ハ悉ク貞徳門ニ歸ス此衆多  
クナリ子ガ説終ニ是等ノ人ト折レシ更ヲ思フヨク其元  
ヲツトメ字ト博ク書ヲ尋子事ヲ正シテ待玉へ必ユルカセニ  
スル事ナカレ

爰ニ哉乃とあははきて………  
たひまふくき

此一條此一巻ノ趣本ト覺ヘリ入ラサルニ此羽雪ナル證  
ヲモ引キ而シテ哉ノ議論ヲモ顯シ不書故ニ此一跋ニ於

◎テハ故有テ不論予ハ金澤ニ生レ又小松ニ居スル事五六  
年此一話幼兒ヨリヨク知レリ又證トスル處モアリ  
有合テ爾ケル  
證ヲ  
イリ此話トハ相違多シ後未別書ニ此日ノ論場ヲ記スヘ  
シ是ハ他ニ讓ラサル一條ノミ

例證ありかひくハ………  
並とけ………

例證ありかひくハ………  
此條ハ條ノ言葉ツカヒ覺ヘタル自讃ナリ知レタル事ヲ  
永クツケテ飽ニイタレハ我ニ於テハ議論スル處ナシ







此条ハ世誹ヘノ教ナレトモ我密ニ思フ令ラサル他門ノ穿鑿  
ナリト誹諧モト奇ニイハサルヲ取り鄙言ヲ好ンテ作ル  
ヲホマレトス然ラハ是梅ヲ以テ松ヲ下知スルニ似タリ彼服  
セサル事顯然タリ我蕉門ノ耳ヘハ雨ノ降り出テモ雅  
ナリ雨降ト云モツ、キニ依テ雅ナラン田打畑打ヲ題ト  
スルニ到ツテハ形ノ俳諧ニ属ス題ノ事ナレハ我論セサ  
ル所ナリ

とくくくくくくく

とくくくくくくく

亦方ふ事をもくくくくくくく

そくくくくくくくくくくくくくくくくくく

此条ハ子ガ一家ノ言過タリ霞ノ春ノミニアラサル詮奇  
我モ見置タリ珍シキ事ニハアラス然レモ春ニ定ル事  
勿論ニテ此コトヘニハ奇ヨリ定家出ラレ誹諧ヨリ貞  
徳出ラレテ云譯セラルヘシ俗誹ノ筆此コトヘスヘキ道ニ  
モアラズ我蕉門モ季節ヲ以テ心トセス暫ク外形ノ







アラス然レ共カノ若狭ノ才子ヲシテ愚ニ道寸ヒクニハアラス  
ヤ春寒キヲエモシラヌトシテイトモカナシキトイハシヨリ只  
何トモイハサル方殊勝ニ聞ヘ侍ラシヤ

又日上ニ業卒ノ哥ヲ置キ爰ニ若狭ノ男ノ哥ヲ置ク  
是ハ奈何ナルツリアヒソヤ春寒キト云ヒ取モ悲キト云ト  
テモ魂ニハリ情ニ入ルヘシトモ聞ヘス是ハ只木ニ竹ヲツキ  
火ヲ水トスル俗鄙ノ理ニ同シカルベシ子表ニハ直ノ詞ヲ  
好キ玉一匹趣向ニ於テハ猶理作ヲマヌカレストハ思ハルレ

ツイテニ愚意ヲ申述ニ此條及ヒ能順芭蕉ノ對話  
ハ今ノ物語リヲ以テ古意ヲ解ス是コトニ趣意アラシ  
カト思ヘリ是子北國ニ杖ヲ曳ントシテノ事ニ非スヤ此  
冊子我カ聞捨ガタキト云ハ蕉翁物語ノ中芭蕉終日  
是ヲ考ヘテ扱誤リツ秋風ハトアラサレハ下トノハサ  
ル物ヲト有ル詞也此詞人ノ志ヲ破ラント能順ニ  
侘ラレシトナラバ千万ノ相違ノ詞アリ凡我咎メシコ  
ハ聞捨難シ定テ知ル哉ノ論ノ事ナルベシカナ万葉



ノ頃ノカモノ詞ニテ歸納カナレハ秋風ニト云フニハ  
不合ハト思ヒヨレルト云事ナラニ是虚言ナリ能噴芭  
蕉ノ對話ハ元録二年八月也此後ニ三年ヲ徑テ  
伊賀越ニテ梅カ香ニノツト日ノ出ル山路哉ト云フ  
句アリ元禄七年四月ノ炭俵集ニ出ル芭蕉翁  
猶在世也モシ此時ニノ哉ニアシキニ心服セハイカ  
一ノ爰ニ此吟アラシヤ兼テ子ハ九間空テ雨フ  
ル柀哉ノ哉ハヨク梅カ香ニ山路哉ハ不叶ト譏リ

玉フト聞ケリ我門ニテハ多友ニ甚タノ解アリテイスレ  
モ金玉ノ吟トス然レハ此ノ日秋風ニノ詞ヲ誤レリト云  
フ事ハヲハサズ子モ又炭俵集ヲ知ル芭蕉翁ノ心服セ  
サル事ハ既ニ知レリ然ルヲコハ誤テリトオモヒ出ルモ又  
尊ムヘキ事ナリトハイカバ蕉公羽ハ衆ノ慕フ所也依テ  
是虚譽ヲカマヘテ衆ヲ釣ルニアラサルヤ只明ラニ芭蕉  
ニテニハラ知ラスト打玉ヘ我ヨク翁ニ代ツテ其對ヘセ  
ン此一条ナラ二月花ヲ見ント云フ人ニハ甚相違ノ心入







明シタル人多カランモハカラレス

俳諧の家系

世々其たくなつて

志れはしきもの

此一条イカ、難タル所聞ユス 儼ニ居テ高キニ交ル蕉翁

ノ詞タルコト聞キ及ハズ不尊シテ高位ニ交ルハ定テ貫之

ナトノ詞ニゾアラン理非ニ於テハ我不知又我蕉門ヨ

ク古キヲ尋フツ又心ヲ付テ見玉ヘカシ

又俗談ニテ後をらるゝ、いとは惜

此詞ハ芭蕉ノ語ニシテ二十五條ノ叢語也大ナルヘク

小ナルヘク千里モ一歩ヨリ始ル妙論コニアリ子カ今日ノ

事ヲ吐クモ又皆此一語ノ助ケシヨリナル呵々

又曰子俗談平話ヲ正スト覺ヘタル猶尊ムヘシ同シ俳門

ニ俳諧ハ俗談平話ヲ正スト覺ヘ甚ノ誤リナリ正スノ

ノ字忘ルヘカラス

道乃

凡道ハうき儼キ、今悔ひておふるを



此一条モ教訓ノ事也當世ノ人情如斯慎ムヘキ事ナリ但  
俳諧ノミニモ限ラス諸藝多クカクノ如ク其中ニモ別シテ地  
下ノ哥ヨミ茶家者流詩人及君カ如キモカク見ユ誦諧  
ハ虚ニ譏ル物ナレハ還ツテ詩シヤアラン

こゝろさしと

凡例 諧ふりよ遊ふ人  
是工こたのい

此一条俳門ヲ補セラルレ氏還ツテ耻ツ近年ハカクモ  
アラズ甚ク薄情多シ但ニ来レル人ニモ依リ留ル所ニ

依リ侍ルナラン夫トモノ遠方ヨリ来ルハ君子モ悦フ所  
古人ヲ祭ルハ其人徳アラハ何藝ノ人トシテカ如此ナラサラン  
親ミ尊トミ替ルヘカラス漫リニ俳門ノミニ肩ライカラスカ  
ラス

唯情むべきハの源といふ

雙林寺ノ碑ノ銘ニ誤リ有ル事其門ノ人ハ聞捨ヘカ  
ラス論シテ早ク改ムヘキ事ニヤ我ハ支考ヲ以テヨシトセズ  
門ヲ卑風ヘ導ク者トスレハ其文ニ於テハ論セシ



やれみきうき……今かくまきいりふなを

此一条ニ到ッテ予思フ事アリ子身ヲ以テ物ノ午本トナ  
ス甚タイワカシ子ガ一生ヲ見ルニ捨ル物多ク背ク物多シ  
蟬ノカラヲカユルヤ彼カ一生只一度ノミヤ子ハ其類ニアラス  
タトヘテ誤レルカ予俗流ノ誹諧ヲ見ルニイカ計カ云破  
ラシ筋アリト思フ又甚ク早風ノ物トセリ然ルニ子ヲ手本  
トシテ是ヲ見レハ又相違セルニ似タリ子ムカシ禪子ニ  
在テ一偈ヲ示ス我大ナリトス而シテ捨テ俳門ニ入ル

又捨テ如此サテハ早風ノ俗俳返ッテ佛法ト同シキ者カ悪  
ト知ッテ勿心ヲ捨ルト聞テ驚クナリ初テ知俗誹モ又大ナ  
ル物ト

文の………俳字………

文きは………を又いりよむ

此一条左アルヘレ世誹ノ謾リナル耻ヘキ事多シカク思  
ヘ我モ又不学ニシテ文章ニクルシム死ニ到ルマテ学ヲ  
ヘキハ文ノ道ナラン然レ氏文中ニ又出家トモノ言追











字音乃

長屋 吉家 朽惜 さまよふ

是等ノ系中別ニ論ナレ知ル人ハヨク知リナンニ其吾

蕉門ノ字音ヲ用ル事ハ是ノミテ據トスルニハアラス直クニ

詩句ヲ断テ入レ語句ヲ假ル是形ニカ、ハラズ意ニ遊

ハナリ

さてその言乃 及乃たらしむ

此一条理リナカラ片言直シノ俗書ニ似タリ實モ

オモヒヤルナドハ同音ナレハヨミタカフル事モアラシカ思

遣<sup>ヤル</sup> 想<sup>オモハル</sup> ナレハ字ニテモ付ケ置ケモヨカラシ

荒磯とりのしを ありそ海のしを

此一条ハ甚非也後世ノ冊子トハ名所方角抄ノ事也

夏ヲヨミトハ芭蕉ノハワセノ番ヤ分入ル右ハアリソウニ

ト云句ノ事也吾是ヲ弁センアリソハ荒磯ノ畧ニテ蒼

海ノ事ナリト計リ子ハ云玉一氏甚尋サル々廉未ナリ

越中ノ國記ニ曰山ヲ有嶺ト云 近年國守ヨリ仰アリテ今ハアリ  
ミナト云山上ニ一村アリ立山ノ中







昔禪室ニ入ル奈何ソ點シテ悟ラサル

明和七臘月十八日

牛口山人 標菴述

るー了らぬ海店後して著めーとりー字とつゝ冊子  
とつゝかさーてめつゝかたなるその系もれーあさーと  
あー物とみくくあ字はむよせむ人いりともを凡志る  
伝たうむ志るをけーら柳店のもそのあへを去たす  
をみるもの才なる某等とてよ一何きまーくあさーかきを  
なーしとて某等の音道をもふれ他語を好むも  
あーねとこのか柳のちよは生れ一志をれはまに紅も玉乃  
私ら一人を教ふまのむらじ他語ハ身候乃たやらあ











ちんぱかくいんりあこーもけぬを糸へたまふこ  
るの母子ちやくもとあうー大娘志る身とまん  
のこ

昭和十二年四月二日影字校合





鹿嶋湯西代倉家此京本と石田元孝  
先生の影寫本と云ふと恩俸に記

云



